

インドで思ったこと その② インドの詩人タゴールの警告

前回についてインド訪問で感じたことを書いていきますので、しばらくの間おつきあいください。

大きな不幸と混乱招いた責任が曖昧なまま日本は戦前、欧米の列強と同じようにふるまい強引に朝鮮を属国にしてしまい、植民地同様に搾取しました。さらに中国の支配をめざして手始めに満州国をテッチ

続



サイエンティストの目

森 利明
(もり としあき)

大阪府立大学 先端科学イノベーションセンター

至り明治以来の大日本帝国は自滅しました。これは無謀な戦争をしかけた当然の帰結でした。しかし極東アジアを中心にこのような大きな不幸と混乱を招いた責任がいったどこにあったのかということについては、結局のところみんなが悪かったのにあいまいにされたままです。国際的な情勢を冷静な目でみる力と見識が欠落していた大本営をはじめとする軍上層部や、当時の政権を支えた政治家諸氏のおろかさに関いた口がふさがりません。その反省をふまえて戦後の日本がスタートしたのに、どうもそついつことを理解できない人がいまだにテレビや新聞で大きな顔をして威張っているのが不思議でなりません。

第一次大戦直後に詩人タゴールが行った警告はアジアではじめてノーベル文学賞を受賞したインドの詩人タゴール(一八六一

ラビンドラナー ト・タゴール



現代インドの詩人。
(1861~1941) 幼少のころから文学に親しむ。法律を学ぶためにイギリスに渡るが、目的を果たせず帰国。このころから、詩作をはじめ、一九一二年、自作の詩集をイギリスで刊行する。その翌年、ノーベル文学賞を獲得する。

一九四二)は、第一次世界大戦直後に日本に対し「道徳的盲目を愛国主義の儀式として熱心に培養する国は、突然の横死をもってその存在を終わることになるだろう」と日本に警告したそうです(堀田善衛「インドで考えたこと」岩波新書より)。その後、日本があゆんだ道と考えると名言だとは思いませんか?
インドと戦争しなかったのは不幸中の幸い
ところで太平洋戦争中にインドは直接には戦争の舞台にはなりませんでしたが、日本軍はインド攻略を真剣に考えていたようです。ピルマ(ミャンマー)に攻撃

(もり としあき)